

# 「元漫才師」 公務員の生き方

## 元漫才師の公務員

私は尼崎市役所で働く、地方公務員。前は松竹芸能で5年間、漫才師をしていた、と言うと大抵の人は驚く。どんなコンビ名で、どんな番組に出たか。年収はいくらだったか、どんな売れっ子と共演したか。お決まりの質問に答えて、最後に、「じゃあちよつとネタやってよ」と言われると残念な気持ちになる。出し惜しみする訳ではないけれど、大事にしているものなので、本当は白い手袋をして丁寧に触ってほしい。自分にとって「お笑い」は、そんな存在だったりする。

## やりたいことをやる

父も母も「自分のやりたいことが一番大事」というタイプ。勉強は得意だったので

進学校には進んだものの、親や学校への反発もあり、生活態度は悪く、優等生ではなかった。他に打ち込むことがなかったので勉強でもするか、という感じで高3から真面目に勉強し始める。

元々、やり始めるとストイックにやり続けてしまう性格で、一浪後に無事、地元国立大学に進学。そこで人生の目標がなくなってしまう。俗に言う、燃え尽き症候群。大学はそのうち中退するつもりだったので、入学後は授業にも出ず、好きだったお笑いをやっているサークルを見つけ、漫才やコント、落語をやり始め、次第にのめり込んでいく。受験勉強と同じで、やり始めるとストイックに打ち込み、4年が過ぎた。周りが就職だ、大学院だ、という中、就職する気が全くなかった私は、お笑いで生きていこうと、松竹芸能のタレント養成所に入る。吉本には当時、高学歴芸人の走りだった「ロザン」がおり、同じ会社だと目



江上 昇

尼崎市役所／シティプロモーション推進部  
／都市魅力創造発進課

【えがみ・のぼる】

1978年大阪市生まれ。尼崎市在住。大阪大学文学部卒。元漫才師。2006年尼崎市役所入庁。自主研修グループ「夜カツ」等、公務員のモチベーションをテーマに活動する傍ら、尼崎ENGAWA化計画などで、公務員と地域の関わり方について、実践的に模索中。他に、NPO法人ファザーリング・ジャパン関西、ビブリオバトル普及委員、日本愛妻家協会会員など。

## 漫才師時代

立たないと思い、松竹を選んだ。本気で食べていくつもりだった。養成所で出会った相手と練習漬けの日々。1年目は2日しか休まず打ち合わせか練習（元日と日本に休まず練習できなかった日だけ休んだ）。すぐに養成所内のオーディションに合格し、3ヶ月で初舞台。ローカルなお笑いの賞をいくついただき、雑誌に取り上げられたり、ラジオのレギュラーをいただいたり、同期が猛烈な勢いで辞めていく中、何とか生き残った。

だが周知の通り、芸人の生活は厳しい。ラジオの出演料は放送局までの交通費より少なく、出れば出るほど赤字。劇場の出番を帯でいただいても、その分バイトを休むから収入は減る。下積み時代の給料は、多い月でも2万円ほど。ちゃんと源泉徴収さ

仲間と立ち上げた自主グループ「夜カツ」



れて手取りは1万8千円。売れないまま芸人を続けていくには途方もない精神力が必要だ。関西では、まずはテレビ局主催の新人賞を獲らないと仕事は増えない。だが、何度挑戦しても獲れない。30歳になるまでに売れなければ辞める、と最初から考えていたこともあり、28歳でコンビを解散、引退した。

### 再就職は公務員？

辞めたはいいが、さてどうしようか。選択肢は2つ。業界に残って、番組制作などの裏方の仕事で生きていくか、それとも全

く違う世界で一からやるか。業界に残っても、お笑いの才能が足りなかったということなのだから、裏方でもそれほど才能がないかもしれない。

どうせ転職するならなるべく振り幅が大きい世界に行こう、と、公務員に転職することに決めた。28歳で何の資格もスキルも持たない自分すがれるのは、勉強とお笑いだけ、と直感的に感じていて、学力試験に受ければ門戸を開いてくれる公務員は選びやすかったこともあったのだと思う。とにかくできるころまで勉強して、ダメだったらまた考えよう、と公務員試験を受けることにし、貯金をはたいてダンボール一箱分の参考書を買ひ、勉強を始めた。

### 運命的に尼崎市役所へ

平成18年4月に芸人を引退。そこからバイト中と寝ている時間以外はずっと勉強し、9月に尼崎市役所から合格通知が届いた。ダウンタウンや桂米朝を輩出し、「新人お笑い尼崎大賞」を開催するなど、「お笑い」を町の魅力として取り組んでいた尼崎市で、第2の人生を始めることになった。試験を受ける前年に、「新人お笑い尼崎大賞・市長賞」を受賞しており、そのご縁もあったのかもしれない。お笑いのまちに就職する、ということに運命的なものを感じて、尼崎市に内定をいただいた時点で他の受験は止め、お世話になることを決めた。

### 元漫才師の配属先は…

お笑いで町おこしがしたい、と勢い込んで入庁したものの、配属は「総務課」。まさかの内部管理で、市の「保健・衛生」に関する予算決算を担当した。

元お笑い芸人としてのスキルを活かすことのない、パソコンの画面と向き合う日々。お客さんはパソコンの中のエクセル表と、うず高く積まれた決裁書、という生活。民間企業での勤務経験もない私は、文字通りの取り方といった基本的なことまで一から教えてもらう日々。上司や先輩方にとつては、年だけ食って、本当に使えない新人だったと思う。早く戦力になろうと焦りながら日々を過ごしていた。残業や休日出勤も多く、先輩方は厳しかったが、仕事を与えてもらえるだけでもありがたく、辛いと思うことはなかった。

その後、数度の異動を経るも、行革担当や条例作成の担当など、6年間、内部管理業務に携わる日々が続いた。平成24年に、まちの魅力を発信する「シティプロモーション推進部」ができるという話を聞き、まさに天職と異動を希望。一年後の平成25年に希望が叶う。今では「忍たま」や「工場夜景」といったまちの魅力作りを担当するほか、自分が尼崎市役所に入るきっかけにもなった「新人お笑い尼崎大賞」も担当業務になった。今思えば、

最初に役所の基礎を全て覚えてからやりたいことをやらせてもらえる、という、理想的なジョブローテーションを組んでいただいたようにも思う。

### 漫才師と公務員のギャップ

芸人と公務員のギャップ、価値観や生活スタイルの違いを埋めるのに当初は苦労した。芸人時代のルールは「面白いかどうか」が全て。頑張っているからとか、ちゃんとしているとかは関係なく、面白いかどうかの1点で存在価値が決まる。どんなに真面目でも、面白くない人間に価値はない、という世界。

対して公務員の世界では、「面白いかどうか」は、ほとんどの業務で関係がない。市民のニーズにどれだけ公平に、瑕疵なく対応できるか。その達成のために必要な諸々の手続きや、その背景にある様々な福祉制度や市の財務、法務、国政や社会情勢の知識等々が問われる。

公務員の世界で必要とされる知識やロジック、表現のテクニクなどに慣れるのは大変だった。自然とお笑い番組を見ることはなくなり、クローズアップ現代やNHKスペシャル、ニュースなど、報道番組ばかりを録画するようになった。

周りの見る目や接し方への対応もきつかった。もちろん、「元芸人が役所に入ってきた」という目で見られることは予想し

ていたもので、外見も話し方も真面目すぎるくらい真面目に作り込んだ。メガネもスーツも地味なものに買い換えた。ただ、外見は変えられても、経歴は隠せない。一番辛かったのは、会う人会う人に「じゃあギャグやって」「面白いこと言って」「さあここで一言」と無茶振りされること。フリたくなる気持ちもよくわかるが、今でも毎回必ず滑ってお互いが怪我をするので、あまりオススメはしない。

### アクティブ公務員への転機

はじめは「変な経歴の公務員」だっただけの自分の転機は、当時尼崎市が他市に先駆けて熱心に取り組んでいた「業務改善運動」の全国大会の司会を頼まれたこと。

「業務改善運動」は、業務の効率化や成果を高める取り組みを推奨する活動で、尼崎市で開催された全国大会は、日本中から前向きな公務員が集まり、成果を共有し、刺激し合う場だった。「司会」という立場でその場に参加したが、そこで出会った人たちやその空間に刺激を受け、「やりたいことがあるなら、与えられている仕事以外の場でも、プライベートで活動すればいい」という、気付きを得、それからいるんな場所に顔を出すようになった。

地域のフリーペーパーの編集会議やファシリテーションの勉強会、プロボノ、ピブリオバトル、公務員が集まる勉強会、ソー

シャルビジネスの勉強会等々、面白そうなものには片っ端から首を突っ込み始めた。「元漫才師」という経歴は、初対面の相手に覚えてもらうにはうってつけで、人脈も広がった。外での活動が増えるにつれ、「元漫才師」という経歴を隠さず、むしろそこから売り込むようになっていった。

### 自主グループ「夜カツ」立ち上げ

そのうち、一人で学んだり、人脈ができたりしても、それを生かす場がないし、市民や市役所にフィードバックできないならただの自己満足になってしまうのでは、と思いつき、若手職員が集まり、活動するグループ「夜カツ」を市役所内で立ち上げた(当時流行っていた「朝活」の夜バージョンという意味)。職員を5人集めて人事課に登録すれば、自主グループとしての活動を支援してもらえる、という制度があり、その時、周りにいた4人ほどを半ば強引に巻き込んでやり始めた。

取り組んだのは、話を聞きたいと思うゲストを招き、綿密な取材に基づいてトークライブを行う会。司会は自分。テレビ朝日の「アムトーク」の構成を参考に、聞きたいポイントやトピックをあらかじめ精査し、ストーリー仕立てで軽妙に紹介していく。ゲストの人となりを紹介するようなエピソードから入り、その後にやり遂げたミッションなどを時系列で追い、苦労や困難を乗り越えた生



読書プレゼンバトル「ビブリオバトル」(写真上)とイベントスペース「amare」(写真下)

の体験談を通じて、その人の価値観や生き様を共有する、といった具合。

2012年に始めたこの会は、運営メンバーを増やしながらかれまで24回開催している。毎回20人〜80人ほどの参加があり、延べ参加者は千人を超えた。これまでに局長や市長、市議会議員らを招き、毎回ゲストを変えながら現在も続けている。この勉強会を始めたことが、初めて私の「元芸人」という経歴と、「公務員」という立場がうまくクロスオーバーした瞬間だったように思う。公務員向けの自主的な勉強会を運営し、ここにテレビ番組や劇場ライブの作り方を落とし込み、司会進行も自分でやる、という

パターンを作り上げた。

### まちの中で様々な活動を展開

イベントを企画・演出し、司会もする、というスタイルは、「元漫才師の公務員」である自分の特長を活かせると感じており、以降、「夜カッ」にとどまらず、そうした方面での活動を増やしていった。

地域の会館の館長と組み、読書プレゼンバトルである「ビブリオバトル」の定例会を始めたのもその1つ。好きな本を持ち寄り、5分で紹介し、一番読みたくなった人が優勝、というシンプルなルールのアクテ

イビティだが、シンプルゆえに司会の力量によってクオリティは左右される。支えてくれる常連さんのおかげもあり、この活動は参加者を増やしながらかつている。新聞でも2度ほど取材・掲載いただいたほか、バトルの様子は地元ラジオ局でも放送されている。

また、まちで知り合った仲間と一緒に「尼崎ENGAWA化計画」というグループを作り、そのメンバーでも「まちを楽しみながら」様々な活動を行っている。縁側のような空間をまちに作りたい、ということからスタートし、閉店した喫茶店をDIYでリノベーションして交流・イベントスペース「amare」を作った。

完成まで3ヶ月かけ、いろんな人を巻き込んだ。一緒にペンキを塗り、板を貼り、延べ228人が関わって完成した。多くの人をプロセスに巻き込むことで、スペースの完成後も「当事者」として多くの人が関わる空間になっており、現在は週に3回ほどのペースで様々なイベントが開催されている(クリエイティブアワード関西2015受賞。興味がある方は検索を)。

### 活動しながら 家族を大事にするために

結婚し、子供も生まれ、管理職になり、多忙になる中、家庭を決して疎かにしたくないと思い、「父親であることを楽しむ生

「尼崎ENGAWA化計画」



き方」である「ファザリーング」を提唱する団体、「NPO法人ファザリーング・ジャパン関西」にも加入している。「父親であることを楽しむ」ことが、母親の負担を減らし、子供にも良い影響を与え、社会を良くしていく。家族にコミットすることが社会貢献につながる、という立ち位置は、私には理想のものと感じており、これからも精力的に活動を続けるつもりだ。子供を笑わせるのに毎日、毎日、新しいことを考える。漫才師時代は苦手だった顔芸も苦にならなくなってきた。

### 元漫才師公務員の生き方

そんなこんなで入庁して10年が経つ。今では新採職員の研修講師を毎年務めているが、そこでいつも言うのが「公務員の仕事は最高にハッピーだ」ということ。社会を良くすることなら、何をやっても市役所の仕事につながる。地域に交流スペースを作るのも市職員の仕事につながる。ビブリオバトルは全国各地で教育委員会や図書館が主催しているし、ファザリーング・ジャパンの推奨する「イクメン・イクボス」は今年国を挙げて取り組んでいるテーマだ。社

会の役に立つことは、何をやっても市役所の仕事につながる。そこに、元漫才師だからできるスキルを活かして関わっていく。それが「元漫才師地方公務員」の生き方だと思い、日々実践している。

### 仕事のためにプライベートを犠牲にするのではなく、仕事とプライベートの目標が同じだということ

毎日昼休みはどれかの作業をしているし、夜も打ち合わせやイベントがひっきりなしに入る。「仕事よりプライベートでの活動を優先しているのでは」と見られているかもしれない。

これらは確かにプライベートで行っている活動ばかりだが、そもそも何のためにそんなことをやっているのかというと「尼崎をおもしろいまちにする」ため。私の活動に興味を持った人たちが尼崎に関心を持ち、尼崎で活動する人が増えることでまちが魅力的になり、まちのことを誇りに思う人が増える。そうすればシビックプライドが高まり、間接的にまちの中の社会課題の解決に寄与するはずだと本気で考えている。私が街のイメージを向上させてやろうと思っているし、間接的に人口増加に寄与してやろうと本気で思っている。

こうしたことは、市での職務であるシテイプロモーションの指針や市の総合戦略にも全く同じことが書いてあるが、これは偶然ではない。市が目指すことと、私を取り組んでいることは、実は全く同じことを目

標としている。市が目指すことの内、自分ができる部分は自分がやる。市のミッションは私の人生のミッションでもあるのだ。そんなわけで、仕事か、プライベートか、私にはあまり関係がない。まちの魅力が高まるなら仕事での成果でもプライベートでの成果でもどちらでもいいと思う。仕事でできることは仕事でやって、仕事ではできない分野はプライベートからアプローチすればいい。それが自分なりの「公務員シテイ」だと考えている。

### 元漫才師公務員、第2章

昨年度、「よしもとクリエイティブ・エージェンシー所属」の元芸人が尼崎市役所に入庁してきた。9年ぶり、2人目の「元芸人の尼崎市職員」の誕生である。彼とも幸いご縁をいただき、今では一緒に「お笑いの手法で行政課題を市民にわかりやすく、面白く伝えることができるか」というテーマで研究と実践を行っている。

行政と市民とのコミュニケーションは難しく、重要な課題だ。それを「お笑い」のスキルを使って興味を持ってもらい、理解してもらうことができるか、といったことに実践的に取り組んでおり、すでに2回ほどライブ形式で舞台上立っている。これも市職員としての仕事につながる。本当に「人の役に立つなら何をやってもいい」。本当に公務員は最高にハッピーな仕事だ。